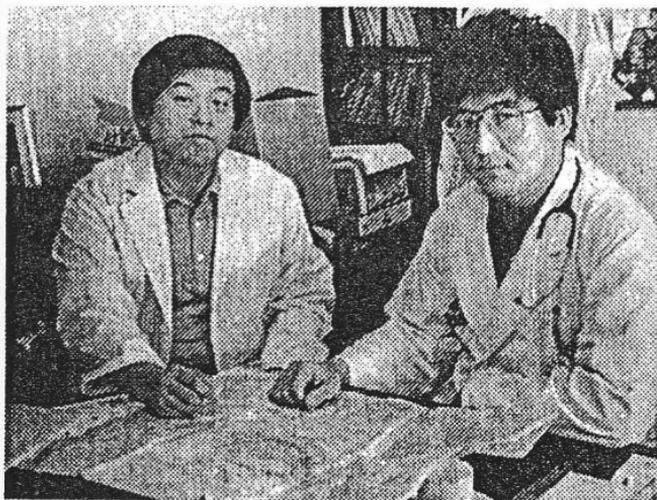


ミャンマー難民救済

「バングラデシュで1人でも多くの人を救いたい」と話す山本、津曲両医師（左から）

92.4



日本人医師ら12人派遣

今月中旬 バングラへ

アジア医師連絡協

アジア医師連絡協議会（AMDA）本部・岡山市檀津、菅波医院）が、ミャンマー難民を救うため、日本など三国の医師団を今月中旬バングラデシュへ派遣、現地の医師と協力して医療活動を進める。来年五月には国際緊急救援チーム「アジア多国籍医療団」を正式に編成する予定で、今回は試験的活動の一つ。菅波医院からは津曲兼司医師（三毛）が十日に出発、山本秀樹医師（三毛）が続く。菅波茂代表（四五）は「これまでの経験を生かし、頑張って欲しい」と期待している。

バングラデシュでは、軍事政権の圧政などのためにミャンマー国内で迫害を受けた少数民族・ロヒンギア族約二十万人が難民生活を送っている。現地の衛生環境は劣悪で、難民たちは草や木で作った小屋に集団で住み、雨期には伝染病の流行も心配されている。

医師団は津曲医師ら日本人とネパール、バングラデシュから日本の大学へ留学している医師たち。今のところ計十二人が参加を表明している。ネパール本国から現地入りする医師らと合流、協力して病気の治療に当たる。日本から浄水器を支援して飲み水を浄化、紙芝居などを使った衛生教育も行つ。津曲医師は「一人でも多くの人を救いたい」と意気込んでいる。

AMDAは、アジア十三か国の医師約四百人で構成。情報交換を図り、緊急を要する被害地での適切な救援活動を目標に昭和五十九年に設立された。これまで

で、湾岸戦争で被災したクルド人やフィリピン・ピナツボ山噴火の被災者らの救援に医師を派遣、医療品を送るなどの活動を展開している。

今回の活動費は同会の募金が主な資金源。五百万円を目標にしているが、まだ達成できておらず、同会では「アジアの人々と共存していくためにも協力して欲しい」と訴えている。問い合わせは同会本部（電話〇八六二一八四一七六七六）へ。